

## 人と馬と里山のつながり 「ニゴと草カッパの会」

木曽の方言で、ニゴ（ニオ）は干草積み、草カッパは草刈場、木曽馬を養った草地の里山です。会は、古老に学びながら、採草地で草を刈り里山の自然を再生し、野草の干草をつくり馬の飼育に利用しています。

昔ながらの馬文化の継承と採草地の自然の保全を目的に、2018年7月に有志が集まり、木曽馬保存会の協力も得て、木曽町開田高原の草カッパで活動を始めました。



写真1 草カッパに咲くキキョウ

馬産地木曽には広い草カッパの里山がありました。草は野草で、長い冬を越す木曽馬の飼葉や敷料として利用され、山間高冷地の農業を支える厩肥にもなりました。



写真2 御嶽山に見える草地に作ったニゴ3号

生活が変わり、草カッパも野草の利用も今では少なくなりましたが、その一方で、昔ながらの草カッパは生物多様性が高く、隔年に行う春の野焼きや秋の

草刈りの伝統的管理が多様性に関連していることがわかってきたそうです。

暮らしが変わっても、木曽馬は地域で愛され、開田高原の木曽馬の里では30頭ほどが飼育されています。新規移住の馬飼いもあります。草カッパ（里山）の自然は希少になったために注目され、関心が集まっています。

秋の刈干の草刈りやニゴ作りは、野草の自然を持続的に利用し馬を養う知恵と技術の一つです。草カッパの自然はそういった馬文化が知らず知らず維持してきたという。ならば、馬文化が草地を保全し、草地の保全が馬文化を継承する、「人と馬と里山」の古くて新しいつながりが出来そうな気がしました。

キキョウ・ナデシコ・オミナエシ、色とりどりの秋の草花は草カッパの多様な生物の代表です。草刈りやニゴづくりは重労働で天候にも左右されます。そんな苦労をやわらげたらう草刈唄は「娘草刈り桔梗は残せ 桔梗女子の縁の花」とキキョウを愛でます。

先人が草地の秋草に一息ついたように、草刈りは、草地の花々や自然を間近に見、手に取り、匂い、五感で感じる機会です。馬を思うと、おいしい草は飼葉に食べない草は敷料に、ともう一束草を刈りたくありません。建築の原点のようなニゴ建ては、モノづくりの面白さが詰まっています。そんな楽しみも加えて多様な人が草カッパに集まり、みんなでニゴを作っていければ嬉しいです。

(世話役 田澤 佳子)



写真3 野草食担当の木曽馬